No.

Date

6/15　第7章　高齢者コメント

私がこの7章を読んで1番考えたことは、アメリカで行なわれているミートプログラムを例にあげて書かれていたボランティアのあり方についてです。より多くの人にボランティアを行ってもらうため、またボランティアを行う人々の中でボスができ、階級ができないようにボランティアの人数を決めたり、働ける日数を限定しているというものがありましたが、このボランティアの方法がすごくいいと思いました。またボランティアをする人も同じ高齢者であるというという点もすごく魅力的でした。ボランティアとなるとどうしてもやる、やられるという構造がなりがちですが、同年代の人同士で行い、また、みんなで分担してボランティアを行うことで受身になりすぎず、共に生きていくという形がとれると思いました。

第7章　高齢者

DATE 6・15・水 NO.

〈疑問点〉

・孤独死の割合はアメリカの方が日本より低いのか？
・高齢者が自分の家、地域に留まることのメリットとは何か
・日本で高齢者が主体的に活躍できる場（ミール、プログラムのボランティアのようなもの）はどのようなものがあるか
・過疎化が進む地域では社会とどうつながりをもっていくことができるのか

〈感想〉

・高齢になっても、認知症になったり孤立したりしないためには、何か趣味をもって、外に出て人と関わることが必要不可決だと思った
　← 何か楽しめること、やりがいのあることがないと時間をもてあまして心身ともに衰えてしまうと思うから
・地元でシルバー人材派遣を行っていたのを思いだした。身体が動くうちは「働く」ことがやりがいのあることになるのではないかと思った
・「マイインターン」のような、かっこいい高齢者像の描写が日本ではあまりないように感じる
・ボランティアのとらえ方もそうだが、日本では高齢者を支援して"あげ"なければならない社会的弱者としてとらえている面が大きすぎるのではないかと思った
・『食文化の違いも社会参加への阻害要因になりかねない』とあったが、グローバル化が進めば進むほど、公共サービスをいかに"どんな人にも"利用できるものにするかは難しい問題だと感じた

（疑問点）

P104　人の特っ能力は、年齢によって変化するが、いつの時点でも、人には活用できる様々な能力が必ずあるはずである。とあるが、年齢によって変化する能力とは例えば何ですか。

（コメント）

今回の章を読んで、同じ「高齢者」に対する問題でも、日本とアメリカでは彼らの位置づけや扱い方に違いが見られ、そこには文化的背景が関与していることが分かり、この現象は非常に興味深いな、と感じました。しかし、そうした事情を理解したよで、日本はアメリカに高齢者への対応方法を学ぶべきではないかと思いました。現に今の政権は「一億総活躍社会」の実現を目指すことを掲げており、これはこれからも増え続けるであろう高齢者に対してのスローガンでもあると当然考えられます。しかし、実際メディアで取り上げられるのは単身世帯の増加による社会的孤立化や無縁社会化が高齢者のなれのはてであるというようなイメージです。そんな今だからこそ、アメリカのミールサービスに見られる高齢者の自立、社会参加の支援の姿勢を積極的に評価し、そこからこれからの対応を学ぶ余地があるのではないかと思いました。

NO.

DATE . .

7、高齢者

日本は「無縁社会」に向かっていると報じられるが、アメリカにおいては、その社会において高齢者の一人暮らしを賛美する傾向があると指摘されているが、どのような社会背景から現れているのだろうか。

一つ感じたのは米国において高齢者はアクティブで、社会に対し、相互的な働きかけを行っている所が一番大きな違いだと思う。

日本の高齢者サービスは、受動的といえるが米国のケースは、参考にするモデルといえるのではないだろうか。

LOOSE LEAF L1201 6mm×36lines maruman

NO.

DATE

・アメリカでは独立が大切なもの、ほめられたことであるので、文中でいわれているようなミールプログラムなどのものが存在するけれど、日本ではどうして無縁社会になったり施設が主流だったりするのかなと思った。

・P.105 人が自分で何かをするということは、本当は利己的なものではなく他人に対する思いやりのはじまりであるとはどういうことか分からなかった。

・P.118 アメリカ文化のボランティア精神とはどのようなものか？日本でも人の役に立ちたい、人と関わりたいと思っている人がたくさんいるけれど、それとはどう違うのか？もし同じだとしたら、どうして制度やとりくみ、高齢者のとらえかたがちがうのか？

・ミールプログラムでは特定の文化に結びつけられるものは提供されていなかったけれど、文化的なものでも、日替わりで色々な文化のものを提供すれば不平等でもないし、逆に交流ができて良いのではないかと感じた。それだと何か問題はあるのだろうか？

・ミールプログラムから宅配にうつった理由として調理、外出が不可能な人の増化があるけれど、ミールプログラムでも、外出が難しくても迎えに来てもらえるシステムがあったので、宅配にうつった理由としては誰かと一緒に食事をするということがあまり大切でなくなったからかなと感じた。

・(P.107) 米国高齢者法の規定で「一定の食事代を定めてはいけない」「利用者は任意の金額を寄付金として払う」というシステムが定められていることが興味深い。日本では考えられなさそうなシステムだと思う。利用者がお金を入れたか入れなかったかや、いくら入れたかがわからないような仕組みになっていることで、利用者が本当に自分の入れたい金額を寄付できるのはよいことだろうと思う。

・この章ではアメリカの高齢者の食事を補助するにあたって生じる問題について述べられているが、日本社会に関連づけることはほとんどされていない。アメリカの制度を日本に取り入れることは不可能ということだろうか。高齢者の扱いがアメリカと日本ではかなり異なることが紹介されていたので、日本で現実化するには他にも様々な面から現在の状況を改善しなければならないだろうと思った。また、日本社会がアメリカを手本にすることは必ずしも正しくはないと思った。

高齢者

NO.

DATE . .

[redacted]

。近年高齢者による犯罪が増加していると聞いた。これは貧困などが原因ではなく孤立が主な原因であると聞いたのだが、この孤立を解消し高齢者たちに生きる意味を見つける手助けをするために老人ホームやデイサービスといった国や地方レベルではなく個人レベルで行うことのできるものはないだろうか。

LOOSE LEAF L1201 6mm×36lines maruman

・「無縁社会」に向かっていると言われている日本であるが、アメリカ社会のように、高齢者の社会的つながり、社会への参加を促すような取り組みは日本ではなぜ生まれなかったのか。
また、そういった取り組みを行うことはできないか。
日本でそういった取り組みを行う場合の課題は何であるか。

・アメリカのミール・プログラムには任意の寄付金によって参加者は参加しているが、足りない分の財源はどうしているのだろうか。
政府から？ 税金から？

・アメリカにおいて人口が増えている難民の人々であるモン人について、彼らの食生活に即したメニューを用意することはできないと書かれているが、難民に対して社会参加を早急してしまうというのはよくないのではないかと思う。いくつかの高齢者の多様性に応じてメニューを用意し、選択性にするなどといったことは不可能であるのだろうか。

7. 高齢者

高齢者といえばくくりにしがちだが、経験によって
個人によって状況が全く違う多様性に富んだ
世代(?)であることが言える。
同じ国内でも切り取り方によって移民の問題など
と同様にニーズに合わせたサービス・支援と
いえると思う。

アメリカの事例から高齢者の支援センターであっても
あくまで主体が高齢者を心がけているという点で
日本のデーケアサービスはどちらかというとお客様
という空気が強いように思う(祖母をみていて思った)

アメリカのようなやり方を日本にそのまま適用できる
のか疑問だ

・筆者のアメリカでのフィールドワークについての記述を読むと、1980年代半ばに行われていたミールプログラムは制度も確立されていて一定の効果をもたらす意味のあるものだと思う。しかし今日の日本ではそのような制度は一般的ではない。アメリカである程度成功したこの制度が日本で広まらなかったのはなぜか疑問に思った。

・紹介されていたミールサービスのように、施しを与えるのではなく高齢者の自立を支え、社会参加を促すような仕組みが重要なんだなと感じた。

No.

Date

7章 高齢化

P106

・高齢者支援の中で「食事」をテーマの中心として掲げるというのはおもしろい発想であると思った。食生活は、国内でも多様性が顕著に現れる部分だからである。

P107

・1960年代からのこの時期にどうして高齢者支援の機運が高まったのか。

・社会福祉モデル、ボランティア組織モデルがセンターにはあると記述があったが、寄付金だけでどのように運営しているのか。資金源はどうなっているのだろうか。

P109

・アメリカではシニア・プログラムが盛んに行われているのに、なぜ日本では盛り上がらないのだろうか。

P117

・アメリカ国内における老人の独住の増加に伴う社会変化を詳しく聞きたい。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-816A 7mm ruled×35 lines

・まずこの章を読んで、私はアメリカでは一人暮らしをしている高齢者が自立・独立の象徴となっていることに非常に驚いた。日本では一人暮らしをしていると、かわいそうだとか寂しそうだとかそのような負のイメージも多いし、孤独死や社会的孤立も実際に社会問題になっているので、アメリカの状況は信じ難いと感じた。

・ミールプログラムは寄付金でまかなわれており、3-4ドル位の食事を利用者は大体1ドル位を寄付するとあるが、これは公共機関のお金の負担はかなり大きいものと思われる。いかにしてお金の面で成立しているのか気になった。

・ミール・プログラムの利用者は年々減少し、宅配食利用者は増加していると、あるが、みんなで集まって食事をすることなしで、他にどんな、社会との関わりをもつとりくみがあるのか。

・ボランティア活動に従事する人の数は変わらないとあるが、ミール・プログラム以外にどんな活動があるのか。

・ミールプログラムの食事代は、任意の寄付金という形でもらうとしているが、ミールプログラムの食材費はどうやって補っているのであろうか。

・もしミールプログラムを日本で行うとしたら、そのときにおこる問題とかはあるのであろうか。

・「高齢者が一人暮らしをするのは自立・独立の象徴」という点に言及しており、アメリカではこれが当たり前だとされているが、とても斬新に思える一方で、なかなか受け入れ難いというか、そう考えるのは理想的であるが、高齢者への支援から離れるための言い逃れみたく解釈してしまう危険性があるように感じた。

・自分の祖父は認知症だが、施設に預けられている。これは家族にとっては介護の必要がなくて楽だし、認知症は病気だから支援すべきだとは思う。しかし家族としてのつながりが薄れているような感じはするし、他者に任せてしまっても良いのか？という感情はある。高齢者の一人暮らしは本当に理想的なのだろうか。

民俗学 7. 高齢者

No.
Date.

自分は、日本人高齢者が、どのような公共サービスを求め、何を理想のライフスタイルと、とらえているのかは、明確には分からないが、アメリカのジュファーソンセンターのエピソードを読んだ限りでは、アメリカ人高齢者と日本人高齢者の間にはニーズの大きな違いが存在すると感じた。

またアメリカにおいて、高齢者自身が自らボランティアとして、介護サービスに参加するエピソードは、日本における「老々介護」を想起させた。子どもに頼ることができない老夫婦や、子どもをも高齢化し、60才を超えた息子が超高齢の親を世話するといったケースである。日本において、これらは、高齢化社会の副産物として理想的なライフスタイルとしては捉えられていない。むしろほかに頼る存在がなく、やらざるを得ないといった状態である。

高齢者の人口が増加し、多様化すればするほど、公共支援サービスは不足し、1人あたりに提供できるサービスは低下し、多様なサービスの提供が困難になるという矛盾をはらんでいるのではないだろうか。

2016.6.15

7. 高齢者

・ミール・サイトが90年代以降活気を失う一方で、ボランティア登録数・従事時間が減らないのはなぜ？　ミール・サイトが社会的孤立を防ぐための場所として機能していたのに代わって、ジェファーソン・センターに人が集う仕掛けが作られたのだろうか。

・在宅介護、宅配食といったサービスはコストの面から見て効率が悪いと考えられるが、そのせいで行政の支出が大きくふくれあがってしまうことはないのか？

高齢者

NO.

DATE

。高校の時に読んだ本で、スウェーデンの例が挙がっていました。
ある日本人の医師がスウェーデンの学会に行った際、
スウェーデン国内の寝たきり高齢者の少なさ（というより居ないこと）に
疑問を持ち質問したら、「それは"寝かせきり"なのでは？」と
言われたというものでした。
日本は高齢者についての考え方を変えるべき？

（より）

。アメリカの例（公共人類学で挙げられていた）のように、
日本もデイサービスのようなものが発達するか
それとも　家で　家族が介護や世話をするか。

2016/6/15　公共人類学 コメントペーパー　7. 高齢者.

日本に住んでいると、「一人暮らしの高齢者」や、「介護施設」といったワードを耳にすると、マイナスなイメージを抱くことが多い。場合によっては国の予算や、地方行政による格差といった問題も浮上し、少子高齢化が進む日本では悩ましい事象である。この論文で取り上げられた、アメリカのシニア・センターのミールプログラムは、"食事"をきっかけにしているが、高齢者自身がゲストではなくホストとなって主体的に活動するという点では興味のあるプログラムだったと思う。しかし、社会の様々な変化によって、宅配サービスが増加していくにつれて、シニア・センターによる交流の場は失われてしまった。もちろん、それに代わる場が提供されたり、高齢者自身が見つけ出したりすることができればいいのだが、現状がどのようになっているのかが気になった。また、注釈でシニア・センターは高齢者が昼間利用する公民館のようなもので、介護施設とは違うという点が述べられていたが、では、介護が必要な高齢者にはどういったサービスが考えられるだろうか。彼らについて考えると、まずは自立・独立を現実的に難しいとして、違う目的があてられるべきなのだろうか。そうなると、日本の介護施設が終着点になってしまうように感じられる。

6/15 7 高齢者

独り＝孤独、不幸という認識は確かに誤った見解であるように思う。
ただ、独り＝自立・独立しているというのもまた偏った考え方あり、文化によってではなく、高齢者一人一人の意志や環境によって、生活スタイルを評価するべきであると思う。

80年代のアメリカのシニア・センターが一人暮らしでも社会的に孤立しない良い例であったが、利用者は減ってきている。
原因として、センターの役割の変化や、社会全体としての高齢者の受け入れが挙げられていた。しかし、それでは直接人と人とが話し、接する機会が少なくなってしまうのではないかと思った。

No.

Date

7. 高齢者　　1466568C. 岡村 祐香

この章を読んでやはりフィールドワークによって making the strange familiar, and the familiar strange が達成されているということを感じた。
日本では近年、本章で述べられているアメリカの高齢者とは対照的に、老人ホームへ入居する高齢者が増えているように感じる。自分の親せきでも、祖母の姉、大おばさんが最近、老人ホームへの入居を決め入居した。これについては家族の間でも議論がなされたが、自分はなかなか主に明確な意見を提示することができなかった。家族で離れるのやはり寂しいが、本人が決めたその意思決定に対して、賛同も反対もどちらの立場をとっていいのか分からなかった。
移民国は、本人の意思決定を尊重してあげたいと思う。この章のアメリカでの高齢者の価値観と日本の価値観はかけ離れている。このような多様な価値観にあふれた世の中で、自分の考えの中にとらわれているのはもったいないことである、と感じた。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-816A 7mm ruled×35 lines

〔高齢者〕

多様性の尊重と標準化は、一致することよりも相反することの方が多い。同時に満たすということは理想であっても、それを叶えることも困難である。結局は、功利主義の考えのような最大多数が幸福になる道をもさくし、同時に、マイノリティを排除しないような例外を作っていくしかないと考える。

元気な高齢者の選択が広がったことが、ミール・プログラムの利用の変化をもたらしたことは、大変納得がいく。今後は、やはり、自由に動けないような人々への政策をさらに広げるべきではないだろうか。

高齢者自身がボランティアとして働くというシールプログラムは、
高齢者に対してのイメージがアメリカとは異なる日本にはない
活期的な取り組みであると思った。
しかし、運営資金は寄付金のみで成り立っているのか、
そうでなければどこから出ているのか疑問である。
これらのような施設を日本につくった場合、はたして
寄付金が集まるのだろうか。
高齢者の一人暮らしというものに対して孤独や危険
といったイメージはどこの国でも同じものであるのだろうと
思っていたが異なる文化背景の地域ではそれをプラスと
してみるということが大きな発見であった。
見方を変えることで高齢者の問題のみならず、
さまざまな問題の解決策もみつかるかもしれないと思った。

「高齢者」について

「高齢化」については著者が年上の人に自尊心を感じさせる必要を指摘するが、私が気になったのは、高齢化をめぐる「社会的な排除」という問題である。よく考えてみれば、社会的な絆が弱まっていき、「無線社会」に向かっている現在の世の中では、高齢者を冷遇する傾向がどんどん強めていく。なぜかと言えば、年をとるにつれて、全体能力が低下していくので、反射能力などに欠けている高齢者は効率的に作業ができないとよく言われ、社会的な面から役立てない存在になってしまうからである。そのため、高齢者に「生活の質」の向上ができる条件を付ける必要はもちろんだが、高齢者に対する分け隔てない態度をどうやって植え付けるのかの方を最優先に置くべきだと私が思っている。お互いに大切にしたり、敬ったりしたら、前に消えていた絆が結べるだけではなく、自分が目標に向かっていけばのは「自分を育ててくれた年をとった父、母、祖父母」などの高齢者のおかげだということが分かるのではないかと私が思っている。

第７章　高齢者

高齢者といえば、一つのもんだいを取り上げたいです。それは、働く高齢者。

アメリカ、日本とヨーロッパの各国では、高齢者がボランテイア活動に参加したりパートタイム仕事をしたりするのは一般なことと思われている。しかも、ベトナムでは、それは絶対一般名なことではない。

ベトナムでは、高齢者はボランテイア活動に参加する対象ではなく、ボランテイア活動が向けている対象なのだ。そして、高齢者が働く場合は、経済的が本当に貧しいか子供が親不孝のため限りだと考えている。このような考え方のもとで、高齢者が障害有無間関係なし、社会に出て働くのができなくて孫や家事などに囲まれている。

一方で、ベトナムでの高齢者の保健や厚生年金のような福祉は高くないので、子供に厄介者にならないよう、働きたい高齢者はいないとは言えないが、自分も子供の面目を守るため、諦めた。実際は、収入が高くない人が親に働かせないと同時に、親は自分の厄介者という恨みを持っている人もいる。

このような状態はいつまで続けるか、どうやって解決できるのか、私の知識でまだ未知まことだ。

No.

Date

7 高齢者

2016.6.15

この章を読んでまず1番に感じたことは、日本の置かれている状況、高齢者に対する問題の捉え方が世界の中では決して普遍的なものではないということである。老後に介護されながら生活するか、孤独に暮らすのかという見方ではなく、自活を通して自尊心を保ちながら自立した生活を続ける環境を用意する、という観点があるということ、そしてそれは今の日本では抜け落ちがちな視点であるということについて考えることができた。アメリカのケースで興味深かったのは、ミール・プログラムの代金を寄付によって募るという点である。本書でも書かれていたように、食事は生活の中で不可欠なものであると同時に、食事をとるという行為を通して社会活動に参画できるという点でも重要な役割を担っている（デリバリーが主流になりつつある、と書かれてもいたが）。高齢者とは少し離れるが、日本でも、給食費未納の家庭の子には給食を与えない、といった事例もあってそれに対する意見が様々であるということを考えると、食事まわりのサービスの充実やシステムの転換が社会の中で重要な役割を担っているように思えて、おもしろいと感じた。

KOKUYO LOOSE-LEAF ノ-816A 7mm ruled×35 lines

NO.

DATE

"高齢者の問題"というと様々な問題が挙げられます。日本においては、(少子)高齢化や、高齢者の孤立化、孤独死が思い浮かびます。

教科書に書いてあるように、日本のメディア報道に見られる高齢者のとらえ方には居心地の悪さを感じられるように思います。極端に言って、"高齢者はかわいそうである"というイメージが感じられます。日本ではアメリカと違って一人暮らしを当たり前としないし、また高齢者は"支援すべき人"と認識しているために、高齢者の一人暮らしなどの孤立化をみてそういった高齢者のとらえ方に居心地の悪さを感じるのではないかなと思いました。しかし、ミールいサービスのような公共サービスはこのような問題の解決につながり、高齢者の社会的孤立を防ぐことができるので日本でも積極的に取り入れるべきだと思いました。

高齢者を単なる支援の対象とみなすのではなく、高齢者自身がボランティアとして働く機会があるようにデザインされたシニアセンターは大変示唆に富んでいると思いました。高齢者の自立や自尊心を感じさせることを意識した取り組みが、高齢者が社会生活を送るうえで重要だと思います。逆に、高齢者は支援の必要な人だと一方的にみなしてしまうと、支援する側はよくても、支援される側は負い目を感じるなどして、支援がかえって受け入れられにくくなると思いました。これは高齢者支援に限らず、災害時のボランティア活動などにもいえることだと思います。

公共サービスをデザインするうえでの多様性の尊重と標準化のせめぎ合いも興味深いと思いました。比較的文化的同質性が高い地域では、落としどころが見つけやすいと思いますが、人の移動が多くなった現代においては困難になっていると思います。本章では、モンの人々と食文化の点ではすり合わせが難しく、食文化の違いが社会参加阻害要因になりうるとありましたが、モンの人々の社会参加を促すにはどうすればよいのか気になりました。

『公共人類学』第７章　高齢者

日本の高齢者のための社会サービスは多種多様である。地域の高齢者のための健康講座など小さなコミュニティから公共交通機関での割引、介護サービスなど高齢者が安全に生活を営むのを支えるためのサービスは様々にある。本文中で挙げられていたシニアセンターのようなコミュニティも、日本にも存在する。しかし、このようなコミュニティはもとから人と集まることが好きな人は参加できるが、そうでない人が大勢いる。つまり、コミュニティのサービスを充実化させたとしても、そもそも参加できない人には目が向けられず、そのような人たちが社会から孤立してしまう。社会が高齢者を支えるうえで、公共領域における社会サービスとしてのコミュニティから漏れてしまっている人をどのようにサポートするかが重要であると思う。また、高齢化が進む中で、社会サービスによって広く、深くサポートすることには限界があるように感じる。そもそも、家族という小さなコミュニティが高齢者をどれだけ支えられるかが重要ではないだろうか。筆者はアメリカと日本における高齢者の一人暮らしに対する認識の違いを指摘し、日本では高齢者の一人暮らしが社会からの孤立と直接結びつき、マイナスに捉えられていることに対して批判的な意見を示していた。しかし、日本とアメリカではそもそもの自立に対する意識が異なる。高齢者の自立が必ずしも高齢者の一人暮らしに結びつくわけではないように思う。自立という概念はアメリカの文化の特徴として挙げられているが、日本における家族の概念とアメリカにおける家族のあり方の概念がそもそも異なるのではないだろうか。社会サービスだけで全ての高齢者を支えることは不可能である。家族という単位で高齢者を支えるためにどのような環境やサポートが必要なのか、公共領域でどのようなサポートができるのかということが重要であるように思う。

・日本と比較して、アメリカの高齢者がより独立したもので肯定的な存在だと知った。

・1980年代のミール・プログラムの話からは、高齢者の栄養サポートと同時に社会的なつながりのきっかけを提供できるいいプログラムだと思ったが、2003年以後に利用者が減ったということが、その後述べられていた。このことは、今まで限られた選択しかできなかった高齢者の選択の自由が拡大したために起こったものとして肯定的に捉えていいと思う。しかし、自由にやりたいことがやれる高齢者と経済的な理由でやれることが限られてしまう高齢者がいる限り、ミール・プログラムを行う意味があるとも思った。

・高齢者ということでひとくくりにして考えることは、サービスを行う側としては楽かもしれないが、元々あるコミュニティー外の人に対しての価値観の押しつけになってしまうと問題がある。いかにより多くのタイプの高齢者を認め、より多くの意見が取り込まれた公共サービスを提供できるかが考えるべき大きな点だと思った。一方で最大公約数的な結論で進めることが本当に正しいのか、頭が混乱してきた。

ジェファーソン・センターにおいて、高齢者を「手助けが必要な人」と見なすのではなく、自分たちが主役だという感覚をもってもらい、自分たちの能力を発揮してもらうことで自尊心を感じさせるという姿勢が日本とはかなりちがってとても重要だと思った。

高齢者を、介護しなければならない人、負担になる人、ととらえることは、たとえ施設や制度の不備で介護者の負担になっている現状があったとしても、高齢者が生きにくい社会をつくってしまう。

高齢化がどんどんすすむ日本においては、もちろん制度の整備も早急な課題だが、むしろ高齢者が活躍できる社会へと変えていくことも必要である。高齢者の人口が多いということは、彼らひとりひとりが能力を活かすことができ、若者に対する遠慮を感じずに生活を楽しめるようになれば、それだけ社会も活性化するのではないか。

アメリカにおける高齢者に対する福祉ケアについて述べられていたが特徴的だと思ったのは、高齢者を「支援する人」ではなく「支援することができる人」ととらえ、ボランティアとして福祉活動に高齢者に参加してもらうことで、人手不足や人件費を問題とせず、さらには高齢者にとっても自尊心を持ち、社会とのつながりをつくれて、彼らの自立を促すことができるという一石二鳥のような仕組みであることだ。このように高齢者の自立を促す仕組みを作ることで福祉にかかる費用が減ったり、高齢者の社会とのつながりを作り、孤独死といった問題の改善にもつながるのではないだろうか。またこれから、高齢者に対する福祉ケアを介護のようにただこちらから与えるものにするのではなく、自立によって自分でできることは自分でする、それができるような環境を整えるといったことにすることで、高齢者の自尊心が持つことにもつながり、より高齢者の暮らしやすい社会が作ることができると考える。

まず読んで思ったことは、日本とアメリカでは高齢者、特に1人暮らしをしている人に対するイメージが大きく異なるという点に驚いた。常識や当たり前であることが別のコミュニティでは別の捉え方をなされることがあり、そういったことになかなか気づく機会が少ないので、文化人類学的思考を持って見直すことが求められると分かった。日本を中心として世界の様々な国において少子高齢化が進んでおり、年金を受給する人を支える労働世代の負担の増大や、国の予算のうちの高齢者向けの福祉の割合が年々増えていることがたびたび問題として取り上げられている。日本では退職の年齢がある程度決まっているなど、高齢者自身の選択肢が限られており、保護されるべき存在として捉えられているように感じる。しかし筆者が述べているように、アメリカでは、1人暮らしの高齢者は自立や独立の象徴として称賛され、自尊心を持って社会にずっと関わっていけるようにすることは、高齢者自身のQOL向上だけでなく、国の予算的にも長期的な効果が望めると考えた。本章では、食事という観点から高齢者の関わりを見ていたが、ほかにも何が考えられないだろうか？私は、教育（小学校において知識や経験、技能を受け継ぐような交流の場の設定）、体力を維持できるようにするためのスポーツ大会などを盛んにやるといいのではと考えた。

この章の筆者である在野氏はアメリカにおける高齢者支援のあり方を説明することによって、日本社会における「高齢者、老い」を社会的孤立や無縁社会の象徴として捉える見方に疑問を呈し、新たな視点を提供している。

世界一の長寿命で高齢化先進国である日本にとって、老いることを人々がどれだけ肯定的に捉えられるかが大きな焦点である。現状では年金受給額が徐々に減っていくことへの不安や不満、また「老害」という言葉の登場からも否定的に取られる向きがある。そこで、日本がアメリカから見習うべきは、高齢者の自立や社会参加を促進する姿勢である。アメリカが自由を標榜する一方で自己責任型の国であることがこの傾向の大きな要因であろうが、高齢者を社会的弱者・庇護すべき者として扱うのではなく、社会活動を担う者として積極的にボランティアをする側につけることで高齢者の尊厳が保たれる。

高齢者の多様性から目を背けて一括りに介護をしなければいけない者という扱いをするからこそ若者も社会全体も、そして高齢者もそれを重荷に感じてしまう。国の状況が全く違うため、シールサービスをそっくりそのまま適用するということはできないが、他国のサービスとも比較して日本は現状を改善していくべきである。

7. 高齢者

高齢者という概念の認識自体を改めて考えさせられた。
一言で多様性といっても、年齢層の幅広さだけでなく文化背景等
多くの点で個人差があるということを再認識した。
また、孤立と自立は遠いようで近いものだと感じ、社会的な人々の
かかわりの重要性を感じ、自立と支援のバランスの難しさを
学んだ。私の祖母は80代半ばであるがクリーニング代理店
のお仕事を未だ続けている。経済的理由ではなく、
一人暮らしの祖母にとってお店は社会との繋がりであると
言っていたことを思い出した。

ジェンファーソン・センターのミール・プログラムの例は非常に
興味深かった。ミール・プログラム自体でもあるが、
ボランティアを募るという点である。お客さまではなく
主体的な関わりが期待される というのは、高齢者が
社会とどのように繋がりたいのか・どのように生活していくことを
望んでいるのかを考えさせられ、祖母の言葉とも重なった。高齢者は
私が想像しているよりずっと活発で自立した生活を求めている
のだろうと思った。

さて、上記のような点についてP.118には"背景にはアメリカ文化の
ボランティア精神がある"と記載があるが、これは他国とりわけ
日本では同じような取り組みは出来ないのだろうか？
(もしくは既になされているのか)　疑問に思いました。

「アメリカでは『一人暮らしの高齢者』は当たり前であり、むしろ自立・独立の象徴」と筆者は述べているが、超少子高齢社会の日本では現実として「一人暮らしの高齢者」は当たり前になっているので、日本でも高齢者に対してそのような見方をし、自立した高齢者を前提として社会と結びつけるサービスを提供することを推進していかなければならないと感じた。そこでは高齢者が自尊心を持てるよう主体となって積極的に関われる場を積極的につくる必要があり、高齢者を精神面を重視しながら支援することが大事だと思う。

ミール・プログラムでは特定の文化に結びつけられるエスニック料理の提供をしない、ポーランド系移民がタターリが、ポーランド料理を出すこともしないとあったが、そこにこだわらずに色々な地域の料理を出せばよいと思った。その方が楽しみの選択肢が増えている現代の状況に合っているし、食べることが高齢者にとってさらに大きな楽しみとなると思う。

民俗学　コメントシート

2016年6月15日

（7）高齢者

・米国高齢者法の規定で、食事代は寄付制とありました。低所得者層の高齢者にとったら非常にいい制度であると思いますが、こういう制度は財政面での負担が大きく、良い制度ではあると思いますが、日本のような高齢者の割合高い国では実現が難しい制度なのかなと思いました。
・多様性ゆえにそれぞれのニーズに答えるのが難しいとありましたが、日本では民族なども混ざり合っておらず、食文化なども特に著しく変わっていることもないので、そういった面では高齢者のニーズをくみ取りやすいのかなと思いました。

民俗学.　　.7 高齢者

日本は少子高齢化が進行しており、介護部門の労働力は不足している。高齢者は人にみてもらいながら過ごすものだと考えていたので、アメリカの高齢者は1人で暮らしているのが普通で、それが自立・独立の象徴として称賛されるのには驚いた。しかしながら一人だけでも生きていける人といけない人がいて、後者の人々のために公共サービスであったり支援などは不可欠である。アメリカではシニア・センターというものが作られ、その中ではミール・プログラムというものが行われている。高齢者に栄養のある食事を提供するのは非常に興味深いものだと思った。日本では高齢者を支援するときは、お金として支援し、それ以外の形での支援はあまり見られない。なのでアメリカでの低所得の人々でも気軽に受けられる食事サービスは良いものだと感じる。食事という何らかの形で支援されるなら高齢者にとってもありがたいのではないか。しかし高齢者の多様化と平均寿命が上がっていくことで、ミール・プログラムの食事では満足いかなくなったりして、ミール・プログラムをシニア・センターまで足を運びサービスを受ける人も少なくなった。食事の種類を増やすなどすればこうはならなかったかもしれないが、このサービスはボランティアによって実行されているため、その質には限度はある。ここをどう国が介入したりして、改善し、多くの高齢者に利用してもらうかが問題であると思う。ミール・プログラムでは高齢者同士でコミュニケーションをとる場となっているので、孤独になってしまうこともなくなる。そしてさらに医療機関などとも連係し、高齢者の様子もみながら、食事をしてもらい、またコミュニティを作ってもらう、このようなサービスが日本で行われたら現在の状況などは解消されるのではないかと考えられる。

高齢者

・アメリカのシニアセンターは全米各地に10000ヶ所以上もあり、それぞれでミール・プログラムが行われ、実際かなり低額で高齢者に食事を提供しているが、これには多額な金が必要であり、財政を圧迫せずにこれからも拡大していくことが果たしてできるのか、という疑問を持った。

・なぜアメリカでは「一人暮らしの高齢者」は称賛されるのか、ということについての説明が本章を読んでもあまり書かれておらず、疑問のままである。

高齢者

アメリカのシニア・センターにおける高齢者支援のあり方とは、「高齢者の自立支援」を第一に掲げたものであり、運営も高齢者によるボランティアが表に出ることで成り立っている。また、利用者についても「支援を必要とする人」ではなく「支援を行うことができる人」として捉え、彼らの自尊心や自立心を重視している。これは、センターの役割が高齢者同士の交流を活性化する場として機能するということを支えている。日本の高齢者支援が「老人ホーム」や「寝たきり」というイメージとともに語られるのは、このシニア・センターのような「自立」を重視するという考え方が一般的でないからであるように思う。このような場における文化人類学の役割は、異なる文化における高齢者をとりまく文化を比較し、支援の改善につながるような提案を行うことである。

第7章　高齢者

NO.
DATE

アメリカに優れた高齢者福祉があるなど全く知らなかった。
日本でも欧米風に家としてのつながりが薄くなり、
高齢者の孤独化が進んでいる。日本ではそのことがとても問題
となっているが、アメリカでは高齢者が孤独が当たり前となっているが
それは全く問題となっていない。アメリカのミールプログラムは高齢者
の食事に注目しており、大変興味深いと思う。食事は人間の
行動の基本となるような行為であり、食事が改善されればその他の
部分にも良い影響を与える。しかもそのプログラムが寄付によって
運営されているということが驚きだ。つまり、このプログラムの価値を
高齢者自身が認めているということである。これはとても大切なことで、
サービスの受給者が任意で負担することは社会全体の負担の軽減となる。
しかし、そのようなミールプログラムも減少傾向にある。それはインターネットの普及や
高齢者の中の格差等が問題である。つまり、高齢者福祉も社会の変化
に合わせて、変化する必要がある。広井人類学は、そのような社会の変化を
認知するのに役立つだろう。

７章コメント

この章は、いままで読んだ章の中で、一番興味をもった。

まず、新しい視点だなとおもったのは、老人の一人暮らしに対する、日米のとらえ方の違いだ。いままでは、老人の一人暮らし＝孤独死、社会との接点が少ないと考えていた。しかし、アメリカでは、自立・独立の象徴としてかっこよくとらえられていた。

ミール・プログラムの活動は、大変意義のある活動だと思った。とくに３つの点で有意義だと感じた。１つめは、食事の作り甲斐がなくなったり、買い物難民になったりして、栄養バランスが崩れがちなお年寄りに、バランスのいい食事を提供できること。２つめは、ミール・プログラムに参加し、そこにきたひとと食事を共にし、会話を楽しむことで、社会とのつながりがもてること。３つめは、ボランティア活動の紹介をして、お年寄りに生きがいを見つけるきっかけを提供していること。そしてそれは、社会みんなのためになること。

ミール・プログラムの活動において、その活動に参加することによって、貧しい人としてひとに見られてしまうのではないか、という心配があったり、近年の状況に合わなくなってきたりという問題もある。

しかし、ミール・プログラムの活動で、学び取るべき点であるのではないかと思ったのは、活動を運営していくうえで、支援される側を支援されるひとという立場にとどまらせるのではなく、ともに活動を支えていくひととして活動に巻き込んでいることや、教養講座なども開いて、お年寄りが主体的になにかに関わる機会を提供し、お年寄りのパワーを、お年寄りも嬉しい、社会も嬉しいという方向で使っているところだ。日本では、これからも少子高齢化が進んでいくだろうし、元気なお年寄りも多いので、もっとお年寄りが力を発揮できる機会を提供していくべきだと考えた。そして、現在日本では、そのような活動がどのくらい行われているのか疑問に思った。

7、高齢者

NO.
DATE

本章を読んで、高齢者の生き方、生活や介護のあり方が変化してきているということが分かった。ミール・プログラムでも見られるように、施設の人間が高齢者に対して、サービスを提供するという姿勢よりむしろ、高齢者側が積極的に参加し、施設はそれを手伝うという形になっている。高齢者の主体的な活動が重視されているようだ。また、シニアセンター以外にも高齢者の居場所が増えたり、宅配食が増えたりという変化があった。

今回、疑問に思ったのは、そもそもなぜ高齢政策がそんなにも重要視されているのか？ということである。労働力にもならないし、消費に関しても、最近はボランティアでのサービス提供が増えており、うまく経済効果を得られない。そういった高齢者の問題が教育などよりも大きく問題視されている理由、意味がよく分からなかった。単純に数の多さから選挙政策に利用されているだけでないのか。

日本では近年共食の取り組みが広がっており、高齢者同士や子ども同士、あるいは世代を超えた共食の場を提供する団体が増えている。そのようななかで、アメリカではセンターに来て食事をする人が減り、センターからの宅配で自宅で食事を取る人が増加している。これは、自分の時間を大切にし自宅で食事をする人が増えたのか、それとも孤立している人が増えているのかどちらなのだろうと疑問に思った。アメリカでは一人暮らしの高齢者は自立していると捉えられるとあったが、状況は変化するものであり、必ずしも全ての高齢者が孤立していないとはいえないと思う。
また、ボランティアが盛んな国であるだけに、多くの高齢者がそれに従事していること、引退した医師や教師らにも活躍の場があることは日本でも参考にしたい部分だと感じる。勿論日本でも高齢者ボランティア募集の広告はよく見かけるが、老後の可能性が多くあればあるほど、国全体にプラスの影響を与えるだろう。老後が楽しみだと思えるような社会がやはり持続的な成長を可能にすると思う。

7. 高齢者

この論文を読んで最も強く感じたのは独立・自立＝孤独・孤立ではないということだった。日本の場合、高齢者の一人暮らしと聞くとつい孤独死等の不幸な事象を連想しがちであるが、アメリカにとってそれはむしろ当たり前で称賛すべき行為であることを知り、カルチャーショック、すなわち文化的違和感を感じた。

アメリカの1980年代におけるシニア・センターのミール・プログラムは非常によくできたシステムで、高齢者の自立を支援すると同時に孤立を避けるために効果的だと思ったが、現在では様々な要因によりミール・プログラムが衰えつつあることには衝撃を受けた。論文を読んでその変化にも概ね納得したものの、私はミール・プログラムにおける食事のメニューの画一性には未だ疑問が残ると感じた。特定の文化に結びつけられるようなものが提供されないのは何故か、納得がいかないのである。機会が平等であれば、様々なエスニック・フード等のものを提供してもいいのではないかと思う。私が経験した日本の給食では、そのような制限はないにも関らず問題に感じたことはなく、むしろアメリカン・フードのみを提供することに違和感を覚えるのである。

1. 古代中国就有"老有所养"的社会理想，现在的中国也有传统的"养儿防老"的社会理念，但是如今大家越来越认识到，老年人的社会生活是无法单纯依靠子女的。无论是经济上的支持，还是心理、感情上的满足，独生子女家庭中，老年人的生活状况问题很多。社会极需构建起一套完善的养老体系。在社会不断进步，家庭单元不规模不断缩小的今天，无论是抚幼还是养老，都应将责任向社会分担，而非传统性的依凭家庭单元。

2、饮食问题确实是老年人生活中的一个重大问题，基础问题。尤其是贫困的老年人，建立老年人专用的公益餐厅是一件很有意义的事，独自生活的老年人，尤其是贫困者，是没有能力保证自己的饮食健康的。如同幼儿有幼儿园一样，老年人也应有一个集体场所，中国有许多养老院，但并没有做到一个社会养老场所应有的，这必须尽快改革。

No.

Date

第7章 高齢者

アメリカでの高齢者の実態は今まで知らなかったが、日本とはとても印象が違うなと感じた。日本での印象は、筆者が述べているようにメディアによる、マイナスなイメージ、例えば寝たきりで介護が必要、孤独死といったものがある。ただアメリカでは、高齢者のポジティブがあると記述してあり、日本と比較されると、より日本のマイナスイメージが強くなった。本文の中では触れられていなかったが、アメリカでは自国内の高齢者たちについてどのように報道しているのだろうかと気になった。

しかし本文中にもあるようにアメリカにおいても、施設における食事のサービスよりも、在宅でのサービスが増えているとあった。この傾向は、日本での場合を考えると、高齢者にとって生活しにくいということが理由として考えられる。しかしアメリカでは高齢者に対しての地域サービスが増えたからといった理由であった。国によってなぜこれほどにも差が出ていくのか。これは高齢者というよりは、高齢者を支える私たちの世代の考え方にあるのかもしれない。

KOKUYO LOOSE LEAF Anna Premium Series

2016/06/15
公共人類学　コメントペーパー

7．高齢者

●疑問点

・日本では、社会的孤立や孤独死の増加を、メディアが強調しているというが、それは本当に過大な表現なのか。
アメリカにおいて、「一人暮らしの高齢者」が当たり前の事実である。それはすなわち、アメリカにおいて、昔から高齢者は一人で暮らすものであった、ということである。これに対して、日本の場合は、かつては、地域のつながりのある社会であったが、近年「無縁社会」となりつつある。その問題の表面化したものの一つに、高齢者がかかわるからこそ、取り上げられるのではないか。
アメリカと日本は、歴史上、高齢者の社会とのかかわり方が異なる。それゆえ、アメリカと日本で同じ現象に対し、異なる表現をしていても、不思議ではない、むしろ、自然なことなのではないか。

●コメント

・P170「高齢者の興味、関心は以前よりもはるかに多様化している。」とあるが、この表現は適切ではないと思った。個人的には、「グローバル社会」において、様々なことに対して「多様化」という言葉の乱用が多く、もっと細かく事象について考えるべきだと思う。
　「高齢者の興味、関心そのものが多様化している」とあるが、私はそうではないと考えた。高齢者本人のみの問題ではなく、彼らを取り囲む環境要因も大きいと思う。高齢者が様々なことに興味、関心を持ち、（今まで言わなかった）意思を表明するようになった。そして、そのような、ある意味「わがまま」な要求をいえるくらい、高齢者は金銭的にも、気持ちの面でも余裕ができるようになった。それは、高齢者の増加などによる、高齢者の社会的階級の認知と評価による。このような「高齢者のわがまま」によって利益を得るのは、高齢者向けのビジネスを行う大企業なのではないか、と思った。

高齢化

日本の社会問題って言ったら、まずは少子高齢化ということばがでてきますでしょう。今現在日本の高齢者のわりあいは全人口の30%以上を占めています。しかも出生率の低下とともに、高齢者の数は増ていくしかありません。このような現状を解決するにはまず出生率を上げなければなりません。だが、それをどう上げるのかは問題ですね。今の日本ではさまざまな政策を行なわれていても出生率の上昇がみえてないというのは、経済的のなやみで子どもをうまないわけではない可能性が高いと思います。個人的の要因もあると思いますが、それらをどうタックルするのを、これからきちんと考えるべきだと思います。

(7) 高齢化

高齢化が進んでいるいる日本では、単なる長生きよりもどうすれば人生をいかに充実したものにできるかを重視するべきだと思う。高齢における社会的役割の喪失は生きがいの喪失にもつながると考えられる。それで、高齢者を「手助けが必要な人」と見なさず、支援を行うことができる人」として扱うことが重要だと筆者も言っていた。なので、より多くの高齢者でも参加できるようなボランティア活動を推し進めていくべきだと思い、ボランティア活動の参加により、参加者自身の健康、生活への満足感も増えると思います。

『高齢者』

日本では非常にマイナスなイメージで扱われる高齢者のイメージだが、アメリカでは"自立"の象徴として扱われていることが日本の価値観や先入観で高齢者を捉えていたからか少し意外だった。自分の考えとしても老後は"施し"を受けるのではなくて自立し能動的にそういったことに関わっていきたいと思ったので。何故日本ではこういった自主性が大事にされる制度が普及しないのは何故か。それは国民性なのかという疑問を抱いた。アメリカと日本の公共性の違いについてもっと知りたいと思った。

Q. アメリカの"自立"の象徴である高齢者の問題はどのようなものなのか？
日本ではこのようなミール・サービスというものは普及しないと思われるか？

民族学　コメントシート⑥

第７章　高齢者

本章を通して疑問に思ったことは以下の三点である。

1. p103一段落目5行目より、「単身世帯の…(中略)…社会的孤立や孤独市の増加」とあるが、この場合の単身世帯は「(子供が巣立った後)伴侶と死別した人」は含まれているのかどうか。

2. p103二段落目5-6行目より、「アメリカでは…(中略)…称賛される」とあるが、具体的な事例があるのかどうか。あるいは、どんな事例からそれが言えるのか、ということ。

3. p114 10-12行目より「ミール・サイト…(中略)…顕著にみられる」とあるが、宅配職利用者の数に大きな変化は見られないのに、食事数が大きく変化しているのはなぜか。この問いに関しては、利用者一人一人の利用頻度が高まったからであると予想できるが、そうなった要因はなんなのか、という疑問がまた浮かんだ。

７、高齢者

高齢者の自立を促しつつ、サービスを利用しやすいようにするためには、ボランティア活動などを通して高齢者の自尊心を回復することも必要であるが、その前段階として若い時の意識の改革も必要ではないかと思う。例えば、自分の祖父母をみてかわいそうだ、みっともないという意識をもって育ってしまうと、自分も同じように何かができない状況に陥った時にそう思われていると感じやすい。また、周りからそう思われることでしんどい思いをする高齢者も多くいるだろう。そのため、高齢者の意識を変えるには、それ以外の周りの世代の意識も変える必要があると思う。
また、自立することを重要視しすぎると危険だ。何をもって自立と定義するかにもよるが、認知症や心身の障がいで自分で意思決定をしたりすることが困難になる人も一定数いる。そういった人たちの意思をどのように尊重し、またその人たちの人権をどのように守るかもきちんと考えていかなければならない。また、そうなったときの家族への教育やケアも重要となってくるだろう。
「食事」という視点で高齢者問題を考えたことはなかったが、とても面白い切り口だと思った。誰もが必要とする一方で、多様性が求められる。また、健康にも直結する問題であるため、好みの問題と同時に健康や安全の確立も必要となる。どこまでを個人の自由として、どこからをケア内容とするのか難しい分野であると思う。

老化するというのは、どんな文化圏においても共通する人類の普遍的現象であるが、「老後」や「老年期」というのはそれぞれの社会制度によって規定される。しかし、社会制度や福祉制度などの社会的要因が似通ったアメリカと日本でも老後の理想とする生き方は異なる。社会制度とともにその人にまつわる様々な社会要因（職業、階層、性別、民族など）が相互に、重層的に影響し合って個人の志向は作られるのだろう。どのような状況に置かれている、どのような人を対象とするのか、どこまでが社会制度のためなのか、など見極めることが難しい問題が多いように感じた。